ちゃいるどネット大阪・マッセOSAKA共催講座

マッセ・市民セミナー（泉州ブロック）

開催日：平成23年７月29日（金）
会　場：泉佐野市社会福祉センター ３階大会議室

「子どもと歩けばおもしろい～対話・共感の保育教育～」

山梨大学教育人間学部　教授
加藤 繁美　氏

こんにちは。紹介いただきました加藤です。今日は「子どもと歩けばおもしろい～対話・共感の保育教育～」という題で話をしますが、本当は皆さんにもっといろいろな形で議論していただけたらと思っています。

子どもにとって恐らく今、社会的保育である集団保育が大きな意味を持つ時代で、こんなに集団保育の力が子どもたちや社会にとって大きな役割を果たさなくてはいけない時代を私たちは経験したことがないのだろうと思います。けれども、そういう時代に一体どういう社会的な支援、つまり皆さんがどんな実践をするか、それを今日話すのですが、皆さんが一人ひとり努力してもそれだけではかなわないぐらいこの社会が子どもを育てるということに矛盾を抱えているわけです。だから、一人の保育者が頑張ればすべて解決しますという単純な時代ではないということを、実は制度論のベースに本当は置かれなければいけないのだろうと思います。いろいろなことを考えるとあまり夢のない議論が多いです。でも一つ、二つだけその話に入る前に面白い話をしようと思いますが、面白くない部分もいっぱいあります。

先ほどの国の制度改革は、おととい、法案の基本的な方向について、基本制度部会や幼保一体に関する部会など三つの部会で議論して、その中身は先ほど言われたように７月６日に一応部会としての中間取りまとめが行われたのですが、それを政府がそのまま法案にするわけではないので、それを法案に具体化する基本的な方針というか、中身が大体固まったというものが出ていました。今国会に出すのはあきらめたみたいですが、次回の通常国会に出すということなので、年度内にこれは通そうということで用意は進んでいます。ただ、総理大臣の問題だけではなくて、政局自体が非常にあいまいなところがありますのでそれは分からないのですが、ただ、法案の骨格までは大体決まっているということなので、そういう意味では本当に敏感に考えながら行ってほしいのです。

１．この20年間の保育行政の変化

1-1．長時間保育の常態化

僕は今日のこの話の前に言っておきたいと思ったことは、実は1990年を境にこの国の保育の在り方は本当に大きく変わってきました。三つの変化があり、その後ろの二つのことを中心に今日は話すのですが、一つは、ご存じのように、90年からこの20年間、「利用しやすい保育所」というスローガンの下に保育の機能の拡大が行われてきました。そのことは保育者自身は保育所の位置が高まるのだから歓迎すべきと思う部分もあるのですが、20年前と今では働き方から保育所での生活の在り方から大きく変わりました。

この20年間で行われたことは長時間保育の常態化です。長時間保育は20年前は、保育者がどこまで頑張っても10時間30分保育所を開けているのがぎりぎりでしょうというのが大体の感覚でした。８時から６時半までの保育はやはりやらなければならないでしょう、そこまでは私たちは時差勤務で頑張りましょうということで保育者はやっていました。６時半という中途半端な時間設定は、子どもが夕ご飯をいつどこで食べればいいか考えたら、６時半ぐらいには家に帰って夕ご飯を食べられるような子どもの生活にしておかなくてはいけないでしょうというのが常識でした。７時まで見ると、夕ご飯を我慢させるのか、園で出すのか、園で出すにしては中途半端な時間というので、昼ご飯、夕ご飯を園で食べる乳幼児の生活はやはり異常でしょうという感じです。だから、６時で帰したいのですが、労働の状況で６時に間に合わない人は一応６時半まで、気持ちは６時にほとんどいなくなることが常識でしょうという感じです。５時ぐらいに仕事をやめて５時半ぐらいに迎えにきてくれればいいのですが、これが30分、30分ずれてもぎりぎりで６時半だったわけです。それでも８時から始めて６時半だから、８時間労働で10時間30分の保育をやろうとしたら２時間半の時差勤務で何とかなるでしょうと考えてきました。

でも、この20年行われたことは、11時間保育所を開けることが大前提で、11時間開けても保育所は「延長保育頑張っていますね」と誰も認めませんよという制度です。つまり、11時間開所からさらにどこまで頑張れるかという競争です。12時間開けて「長時間ちょっとやっている園ね」、13時間やると「結構頑張っていますね」と褒めてくれるという、ちょっと異常なのです。８時間勤務で13時間開ける。そして、保育者は８時間で帰るのですが、子どもは11時間～

12時間園にいます。365日の生活のほとんどを家から離れたところで10時間以上生活する乳幼児の生活は、やはり本当は異常なのだろうと思いながらも、これはやらざるを得なくてやっています。

乳児も一般的に入るようになりましたし、１～２歳児がやたら多いのです。けれども、こんなに来る予定で部屋をつくっていないのですが、来てしまったら保育しなければいけないのです。部屋はないけれども子どもは入った。だから、すし詰め状態でもやらなくてはいけないわけです。国の基準は子どもと保育者の比率だけ決めてあるわけですから、６対１という比率を守ったら１部屋に24人の２歳児が入っていても法令を違反しているわけではないのです。でも、２歳児が24人の生活をするというのは、刑務所でももっといいでしょうという感じです。２歳児は20人も友達の名前が覚えられないのです。いつもどこかで見たことがあるなという子と一緒に生活するというのは、彼らの発達からしてやはりまずいのです。だから、本当は６対１の数は、実は子どもが一緒に生活していい仲間の数が６人を上限とするというので、僕などは厚生労働大臣になったら「２歳児は６人以上一緒に生活させてはいけない」と法律をつくります。それぐらい大事なことなのです。安定した生活をつくれといいますが、24人子どもがいるのに保育者４人を配置して、４人が一人ひとりの心の拠点になるといっても無理です。子どもはあちこちに行ってしまうし、担当を決めても担当の子どもがあっちとこっちに行ったらどうしていいか分からないし、だから、本当に子どもにも不幸な状況が広がっていると僕は思います。

これは考え方からしたら、今まで性別役割分業型社会で、男が仕事、女は家庭で子どもと老人を守る、そういう性別役割をベースにした社会を、男女共同参画型社会といって男も女も一緒に働く社会にしようという、それも私たち保育所の側が進めてきたことなので否定できないし、世の中は男も女も平等になるということはいいことだし、私たちが頑張ってみんなが平等に、だけれども、頑張れば頑張るほどみんなが疲れてしまうというジレンマがあります。保育所が開ければ開けるほど、「開いているのだから残業してくださいね」と言ったら断る理由がなくなってしまうのです。だから、今までは「保育所の先生が帰ったらうちの子どうなるのですか」と言ってみんな残業を断って子どもを迎えにいけたのですが、それができなくなるのです。だから、保育所が頑張るとみんなが疲れる社会になってしまいます。それでも私たちは「やらない」

と言えないし、やることが奨励されると頑張るわけです。震災の後に木曜日と金曜日を休みにした企業が出ると、その地域では土日にちゃんと保育をやろうというので日曜日の保育をやっています。そんなにお客はいないらしいのですが、でもやり始めたらやめられません。そのように考えたら、なぜか分からないけれども、利用しやすい保育所のために頑張れば頑張るほど何かがおかしいという感じがします。

1-2. ヨーロッパは親の労働時間削減が先

実は、1970年にヨーロッパでは全く同じことが考えられていました。男と女が性別役割分業の時代ではないでしょうというので男女共同参画を考えました。だから、男も女も働く社会をどうデザインするか。しかし、そのときに最初に保育所の機能を拡大しようとしたわけではないのです。一番最初にやったことは、男も女も一緒に働く社会は、男も女も働きすぎてはいけない社会だということで、労働時間をいかに削減するかという議論をしたわけです。総労働時間が増えるのだから、その分一人ひとりの労働時間を削減しようという議論を最初にしました。ボタンをどこから掛けるかによってすべてのことが変わってしまうのです。日本の場合は先に保育所の機能を拡大したので、そこへ行かないのです。

だから、ヨーロッパの場合は、週35時間労働がベースです。１日７時間労働で、ヨーロッパは大半がキリスト教の国だから土日は宗教上働いてはいけないのです。だから、土日休みで１日７時間でやっているわけです。しかし、当時も問題だったのですが、年休をみんながちゃんと取らない。年休という制度をつくったのに、幾ら余ったと威張っているような人が日本でもヨーロッパでもいたわけです。一緒に働く時代に年休を余らせるような状況はいけないから取ることを奨励したけれども取らなかったのです。それでフランスやイタリアなどを柱にしながら、北欧諸国もそうですが、年休を完全行使させるために年休を使う月間をつくるわけです。つまり、２週間以上年休をまとめて取らなければいけないという法律をつくるのです。これはILOで国際条約としてそれを結ぼうということになっているのですが、日本は批准していません。

土日完全休みで、２週間以上連続した休暇をみんな取らなければいけないのです。これがバカンスという制度になりました。だから、８月は保育所はやり

ません。８月にやっているところはばかだと言われますから、８月は丸々園全体が休むので働いてはいけないのです。だから、みんなは１年間のうち１か月は脱力して生きるのです。５日を７時間労働で生きれば何とか楽しく生きられそうでしょう。しかも、夏場はサマータイムですから時間が１時間早いわけです。だから、３時ごろ仕事が終わって、４時に帰るということを普通にしているのです。そういう状況の中だったら、幼稚園、保育所の差なく、ちょっと頑張ってそれぐらいみんなやりましょうというのはいいのです。働く時間を制限して、大人たちがゆったり家庭で生きられる状況をつくっておいて、そこを社会的に規制をしながら、その上でその子どもたちを誰がどういう形で守っていくかという議論をします。保育所の拡充は３番目にすればいいわけです。

つまり、男と女の働き方の調整から休み方の調整をした上で、その間の子どもたちの幸せをどうつくるかという議論をしたら、こんなに矛盾は出ないのですが、日本はそのことを全くしないままに保育所の機能を拡大することによってそれを成し遂げようとしたから､実は議論がおかしくなってしまったのです。保育所が頑張れば頑張るだけ親たちは死ぬほど働き、死ぬほど働くから子どもに「ねえねえねえねえ」と言われたら腹が立つのです。だから、子どもと一緒にいることが面白いどころではないわけです。うっとうしい子を産んでしまったなと途中から思うのです。この負のスパイラルが起きています。皆さんは一生懸命なのですが、家庭で疲れた子が、保育者を求めて「ねえねえ」とやってくると、あなた一人の専属保育者ではないのだからと思ってしまったり、なかなかうまくいかない問題がいっぱい出てきています。社会制度はどこから手を付ければすべてがうまくいくのかというのはルールがあるはずなのに、そのセンスがありません。最後に子どもに付けを回してどうするのという感じです。

1-3. 新しい制度　補助金の流れの変更

そういう中で幼保一体化というので、表面上は幼稚園を保育所的に使おうということですが、実は保育所の方が大きな変更が行われます。中でも僕は、「こども園給付については、保護者に対する個人給付を基礎とし、確実に学校教育・保育費用に充てるため法定代理受領の仕組みとする」という文章が実は本当は一番重要な１行だと思います。

それはどういうことかというと、民間保育所で考えれば一番分かりやすいで

すが、今までは１か月この保育所を運営するために国が計算した額が保育所運営費という形で保育所に対する施設補助としてお金が来ていました。例えば1,200万円の施設補助がぽんと来るという形で園運営の金をまとめて保育所に渡していました。この考え方を、これからは幼稚園も保育所も総合施設なるところも全部、この1,200万円なら1,200万円のお金を子どもの頭数で割って、一人当たり何円ですねと割ったお金を親に直接補助する、この親補助形式に変えるのです。親にお金を渡して、もらった補助金と自分の保育料を持って自分がどこの園にするかと親が自分で選ぶ、親に直接補助をするシステムで、そのもらったお金を持って親が地域にある園を自分で選んで契約するという形に変えるというわけです。親が全部園と契約を結び、国からの補助金を園に持ってもらう。つまり、子どもの数が少ないと少ない分園の運営費が毎月減ったり、増えたりする仕組みです。定員と無関係に人気のない園はつぶれるしかない、そうでなければ親は集めるしかない、そういう制度になってきます。だから、政策誘導して幼稚園もそうするというのは、金がないから保育者に給料を払えない。そういう仕組みになっていくので、実は長時間をやらざるを得ないでしょうという感じで考えています。

その制度に最もそぐわないところはどこかということを考えると、これが公立の保育所です。つまり、個人に補助金を全部渡すので、全部渡したお金が集まって運営するという平等性からしたら、親に渡したお金を集めたもので給料も払う仕組みに変えると書いてあります。けれども、公立保育所は給料は別の予算枠で払っているとしたら、ちょっとルール違反ではないかということが問題になったときに、公立保育所の存在そのものが問われることになってきます。しかも、施設運営費の中の施設補助費、つまりこれを減価償却費といって、10年たったら施設は古くなる、古くなったら補修しなくてはいけません。それは今までは別枠で予算申請をして修理のお金を取ってやっていたのですが、その分も全部一人ひとりの親に分割して毎月渡すと書いてあります。その分も含めて経営しなさいというと、公立保育所だからというので市の予算で修復し、ほかの保育所はすべて親から集めた金だけで修復しなければいけない、これは不公平でしょうということがまた出てきます。

なぜ、そういうことをしたかというと、株式会社には経常経費の中に施設を直すためのお金（施設補助費）は払ってはいけないというのがこの国の規定で

す。私有財産を税金で豊かにすることはしてはいけないという憲法上の規定があるので、だから、株式会社立の保育所を認めたのですが、株式会社立の保育所が建物の修理をしたいといってもお金は来ない。普通の認可園が新しい保育所をつくりたいといったら、建物を造るために４分の３の金が公費で補助されるのですが、それも株式会社には来ません。新しい保育所をつくるときの基準はまだ出ていませんが、途中で補修をするときなどに掛かるお金は親経由で渡してありますよということになっています。ここのところが、特に公立保育所にしてみたら存亡の危機の制度改革になってきます。民間とのルール上、公立が存在できないような仕組みになっているところに問題があります。

そして、親がもらった金で選ぶ、だから、親と保育所との市場の関係で保育所が動き始める。そこに幼稚園も一緒に参加して、英語をやっているところと心を育てるというところが競争し合うわけですから難しいです。目に見える形に現れた教育の成果と、形に現れないものこそ大事なのですと誰にも分かってもらえない保育をやっているところと、これが競い合うというのは難しいです。宣伝もしないで、食べてみたら分かりますといった商品と、いっぱい宣伝して、毎日のように名前がインプットされる商品とが一緒に店に並べられたら、「食べてみれば分かります」と言われても食べるのが不安になります。でも、毎日宣伝されているといかにも効きそうな感じがするでしょう。だから、そういうものが平等に競い合い、そして、勝ったところが正しいと考えられる。こういう考え方が新自由主義という社会原理だと小泉改革のときから言われています。

新自由主義は自由主義と何が違うかといいますと、いい商品が市場に出回るのではない。買われた商品がいい商品なのだという形ですべての社会的な制度を市場の論理で動かしていこうというのが新自由主義という考えです。こう考えたら保育の世界はこのまま行ってしまうと、いい保育がみんなに認められるのではない。親たちが選んだものがいい保育なのだ、こういう原理で保育の世界を回していく。だから、選ぶための原資として税金は親に渡しますよという形で実は論理がつくられています。

ややこしいけれども、親に渡したお金で晩ご飯を食べたりしたら保育所に金は来ないではないか、国もそういうことも考えていまして直接渡したりはしません。原理上は親に渡すしか公費の出し方はないのですが、実際のお金は計算

上園にまとめて法定代理受領、つまり親に１回渡ったことにして園に渡しますよというしち面倒くさい論理を使って今回の制度を設計しています。裏にあるものはかなり私たちが保育で大事にしようとしているものとは少し違うところにあるようで、動き出したときの怖さも含めて皆さんはよくよく考えてほしいなと思います。

1-4. 集団保育の役割は大きい

僕は先ほど三つと言いました。何が三つかというと、1990年から変化したことです。これは保育制度の拡充ということで一つ変わりました。もう一つの変化は親たちです。この90年という年が日本にとってみたら虐待元年といわれるのですが、厚生労働省が本格的に虐待調査を始めた最初の年です。虐待調査といっても、児童相談所でどれぐらい虐待の相談を受けたかという調査です。1,101件が90年のデータでしたが、これがあれよあれよというううちにこの20年間で50倍の数になりました。この問題が親との関係の難しさ、親たちが変わってきた、そのことが保育の難しさとつながっています。

そして、それと同時にこの20年、保育者の実感としては子どもが変わった。つまり集団保育が非常に困難になったという実感があります。その困難さは保育者の能力が落ちたからなのか、子どもが変わったからなのか、それだけではなく、もっと複合的なのか、当たり前の集団保育の形が保育者自身がよく分からないぐらい子どもと一緒にいることがつらくなる。親子がつらくなると同じように保育がつらくなる。そういうことが結構進行した20年でした。

僕はそういう状況だからこそ、集団保育の役割が大きいと思います。つまり今、親の努力だけで子どもがちゃんと育つとは思えない。でも、保育者個人が努力すればちゃんと育つというほど簡単な状況でもない。それだけ子どもが当たり前の人間に育つこと自体が難しい状況になっています。ところが、じわじわとそういうことを感じはするのですが、一体何が起きているのかということは誰にもよく分からないので、先ほどから言われているように、こういう制度改革をするときに、子どもにとって保育所や幼稚園がどういう意味を持つところにならなければいけないのかということは大きな政策課題になっていません。でも、そこを保育者の実感も含めて語っていかなければいけない。子どもにとって私たちと生きるということはこんな意味があることなのだというこ

と、そして、こんな意味ある場にしなければいけないのだということ、それはそもそも子どもが生きるということの原点を私たちはいつも確かめながら広げていくしかないだろうと思います。

2．子どもの生活は物語で満ちあふれている

この「子どもと歩けばおもしろい」というのは、こういう時代だからこそ子どもと一緒にいることを面白く感じるような社会をつくらなければ駄目でしょうということです。本当にそのとおりです。子どもがいなければ世の中つまらないです。大人ばかりだと面白くないです。うちも３人子どもがいましたが、だんだん大きくなると憎らしいけれども、でもいる方が楽しいです。今、夫婦二人と犬しかいないのですが、こうなると話題に事欠きます。子どもは変なことをいっぱいやるもので、いるだけで楽しいです。あんなに一生懸命時間があればあるだけ考えながら生きているような時期はないです。時間を惜しむように一生懸命生きています。その姿にこっちがぼーとしていてはいけないなと励まされたりするのですが、話題には事欠きません。

僕は、この「子どもと歩けばおもしろい」というのは、前に小学館で本を出していて、それを先ほど紹介してもらったひとなる書房でリニューアル版を出したのですが、その中にいろいろと子どもの生活は物語で満ちあふれているというので、いろいろと難しいことはありますが、子どもは本当に面白いでしょうと書いたのです。子どもと一緒にいることを楽しいとか本当に面白いと思うのはしんどいかもしれない。でも子どもを面白がることぐらいはできるでしょうと、そういう目で見ると本当に面白いです。

2-1．『幼児のつぶやきと成長』より

例えばこれは大月書店から出ている『幼児のつぶやきと成長』という本から紹介しますが、幼児たちはぼそっとつぶやくのです。家に帰って園で考えたことを、自分で考えて「もったいない」と思うのでしょうね。ついぼそっとしゃべるのです。そういうつぶやきを聞いているだけで子どもたちはこんなことを考えているのだと思います。ほとんど無駄なことです。役に立たないことをこんなに一生懸命やれる子たちはいいです。抱きしめたいぐらいいい子たちです。

「むかしむかし」

「ママ、昔っておじいちゃんとおばあちゃんたくさんいたのね」。これはタイトルが大事です。つまりお母さんがいい人で、毎日「昔話」を言ってあげるわけです。「昔々、あるところにおじいさんとおばあさんがおりました」、こればかり聞いていると、昔はおじいさんとおばあさんしかいなかったのかと彼らは考えてしまうわけです。桃太郎の母さんはどこに行ってしまったのだろうとか、こういうことを考えると、お母さんがずっといない人ばかりだったのだねとか、こんなことをまじめに考えているのです。私たちが考えるのとちょっとセンスが違うことを考えるのですが、面白いです。

「シッカロール」

この子は賢い子です。１歳９か月でこれだけしゃべれるというのは立派なものです。「７匹の子ヤギをおおかみだわおー」、分かりませんね。「シッカロール」という題が大事なのですが、この訳の分からない言葉を翻訳すると、「７匹の子ヤギをオオカミだ、わおー」と言ったのですが、これはお風呂から出て、シッカロールを付けてもらう。手が真っ白になってしまったわけです。この真っ白になった手をはっと見たのでしょうね。保育所で読んでもらった『７匹の子ヤギ』の話とつながるところが１歳９か月らしくないです。２歳半ぐらいで十分ですが、２歳前でここまでやらなくてもいいのですが、それが白い手とはこれなのだと思ったのでしょう。これはすごいです。自分の手に起きた変化とお話がつながってこういう言葉をぽっと言うわけです。頭の中にいろいろなことが回っているなと思うと本当に抱きしめたいような子です。

「絵本」

３歳の子ですが、「私、本に入れないわね。おばあちゃん、助けたかったけど」、いい子です。こうやって本のおばあちゃんにまで心を砕いているわけです。私たちは想像力が枯渇してなかなかそこまで考える力がないのですが、こういうことがこの本にいっぱい出ているのですが、面白いです。

「ゴキブリ」

２歳の子ですが、ゴキブリを見たら見たでいろいろと言うわけです。「どうしてゴキブリ汚いの？　お母ちゃん、お風呂に入れてきれいに洗うたり」とか言うわけです。セミを捕まえたら「よく捕まえた」と言われたのに、ゴキブリを捕まえたら「早く捨てなさい」と怒られるわけでしょう。何でゴキブリだけこんなに差別されるのだろうと子どもなりに悩んでいるのです。

「遠足」

４歳の子です。「どうしてみんなと一緒に歩くときは疲れて、みんなとお弁当を食べるときはおいしいんだろう」、それは「みんな」は関係ないのです。歩いたから疲れて、弁当を食べたからおいしいのです。でも彼は、みんなと一緒なのに何で歩いたときには疲れるけれど、弁当を食べたらおいしいのだろうと思うのです。われわれは考えませんね。因果関係は「みんな」にはないのだということを話してやりたいですが、でもこの子は同じみんななのにこんなに気持ちが違うのは変だと悩んでいるわけです。

「ふつうの人」

６歳の子です。「お母さん、悪いことしたら地獄に行くんやろ。いいことしたら天国行くんやろ。普通やったらどこ行くんや」、これは難問でしょう。いい子と悪い子だけ行き場があるのです。どっちにしても行き場がある方がいいですよね。普通の子は行き場がないではないかとこの子は悩んでいるのです。

「立たされちゃったの」

３歳の子ですが、この子はお母さんがいい人です。「廊下のところでアキちゃんたち立たされちゃった。ピアノのところで騒いだから。みんな泣きそうになった。アキちゃんが『寂しいな』って言ったら寂しくなっちゃった」と言うのです。この子は３歳児ですよ。ピアノのところで騒いだぐらいで怒って立たせる先生がいまだにいるのですね。だけれども、それを親に「廊下のところでアキちゃんたち立たされちゃった。ピアノのところで騒いだから。みんな泣きそうになった。アキちゃんが『寂しいな』って言ったら寂しくなっちゃった」と言うわけです。何でこのお母さんがいいかというと、これを書き留めるだけの余裕があるからです。書き留めて、「そうか、そうか、いや、つらかったな」と抱きしめてやったのでしょう。

書き留める余裕がない人は、話を聞きながら途中で「そうか、そうか」と言いながら、「誰、誰、どの先生、どの先生が立たせたの。言ってごらん」と言います。こういう人は最悪です。次の日それをもとに園に抗議に来るわけです。園長の対応がぐずぐずしていると、市役所にまで抗議を出して苦情として上げていくわけです。そういう人、やめてほしいですよね。なぜかというと、３歳の子が家へ帰って園のことを悲しいこともうれしいこともしゃべるというのは、今、私はこのことで悩んでいるのですけれどもお母さん解決してくれませ

んかと言っているのではないのです。自分の中ではもう解決済みの問題なのですが、あのときの気持ちだけは受け止めてほしいと言っているわけです。蒸し返してどうするのという感じでしょうね。それでまた大ごとになったら、この人にはやはり言わない方がいいなという学習をしてしまうわけです。

その辺が最近の親はよく分からなくて、ストレートに「何々ちゃんがかんだ」と言ったらその子に抗議したり、そういうことではないでしょうと、かんだのが一つのストーリーになっているわけだから、この子の中ではそれなりの人生のつらさとして受け止められているのだから、蒸し返すのではなくて、「そうか、そうか、つらかったな」とエネルギーをやればいいだけなのに、そこら辺がゆとりがないです。だから、子どもの言葉で一喜一憂しながら子どもに振り回されてしまう。本当は大人がもっと大きな気持ちで育っていく子どもを受け止めなければいけないのですが、その度量がどうも小さくなっています。２歳児といい大人が対等に向き合って戦っている感じです。だから、子どもたちもしんどいのだと思います。

園で生きていること自体がしんどいのですが、そこで一生懸命頑張って子どもが戦った姿を家に帰ってきたら受け止めてやるだけでいいのです。それだけの余裕があるからいろいろなことをしゃべる子になって、その力をもらって園でまた戦ってくるわけです。子どもは一人で親から離れて仲間と生きること自体が一つの戦いです。その中でたくさんのドラマをくぐっていくのです。そのことをきちんと受け止めてくれる大人がいたら、そこのことをぼそっとしゃべるわけです。ぼそっとしゃべったことの裏側にある大きな物語を理解してきちんと意味付けてやる、それが大人の仕事です。

「男と女」

４歳の子です。「お父さんは男だから新聞を読んで、お母さんは女だから広告を見る」、朝ご飯を食べながらしみじみと言われるとつらいものがあります。たまには替えましょうね。

僕はこの『幼児のつぶやきと成長』を読んでいると、書き留めてくれているお母さんや先生たちの心の余裕、子どもと共感するということ、その余裕があれば子どもは本当に自分でもっともっと考える子に育っていくのだとつくづく思います。

「生まれてよかった」

これは４歳のカノウヤスノリという子がお母さんに話したことです。「お母さん、よしくん生まれてきてよかったな。お母さん、のりちゃんもやっちゃんもお父さんもお母さんも生まれてきてよかったな。お母さん、赤ちゃんという名前いい名前やな。赤ちゃんという名前ちょうど赤ちゃんやな」と言うわけです。これは弟が生まれたのです。病院へ見にいったらみんなが「よかった」「よかった」と言っているのです。そのみんなの顔を見ながら、この子は考えてお母さんにしゃべったのです。「よしくん生まれてきてよかったな」と、「お母さん、のりちゃんもやっちゃんもお父さんもお母さんも生まれてきてよかったな」と、誰もお父さんが生まれたことまで考えてはいないわけです。けれども、この赤ちゃんをみんなが喜んでいる姿を見て、みんなが生まれたというのはすごいことなのだなと４歳児が考えたわけです。そして、「お母さん、赤ちゃんっていい名前やな。赤ちゃんという名前ちょうど赤ちゃんやな」としみじみ言うわけです。「赤ちゃんという名前ちょうど赤ちゃんやな」と、これはすごいですね。実はこの子にとってみたら、「赤ちゃん」という言葉、それはもちろん国語辞典などには「男性と女性の間に生まれた一つの生命体」と書いてあるわけですが、そういう辞書的な定義としての「赤ちゃん」という言葉を知っていたのですが、それとこの体験の赤ちゃん、「赤ちゃんという名前ちょうど赤ちゃんやな」、よく分かりませんね。「赤ちゃん」は無機質な言葉です。赤ちゃんは赤ちゃんというので誰が言っても赤ちゃんです。でもこの「赤ちゃん」という言葉を聞きながら、意味と言葉がつながったときにしみじみその言葉が自分のものになってくるのです。

これは何となく分かると思いますが、僕が大阪で夜間中学の実践を本にしたものを30年ぐらい前に読んだときに、日本語の文字の読み書きができない50代の人が初めて夜間中学で字を勉強する。それで「夕日」という字を一生懸命書いて、「夕日」という字が書けるようになった。夕日は知っていたわけです。でも学校から出て本当に赤い夕日が見えたときに本物の夕日を見ながら「夕日」という字がそこに浮かんできたという、そういう50代の女性の初めて字を勉強したときのことが書いてありましたが、実はそれと似たような感じです。「赤ちゃん」という言葉が言葉としては赤ちゃんなのですが、意味というのは、実はこの子にとって赤ちゃんというのは、最初は何てことはない、こういう子を赤ちゃんというのだなと思っていた。そのことがこのよし君という一人の子

が生まれた日に、このお父ちゃんの幸せそうな顔、お母ちゃんのうれしそうな顔、おじいちゃんがこんなに顔をほころばせて幸せそうに笑っている顔、近所の人までも「よかった」「よかった」と言っています。この一つの命を見るだけでみんなが幸せになる。そのたくさんの表情と一緒に「赤ちゃん」という言葉を感じたわけです。だから、「赤ちゃんという言葉ちょうど赤ちゃんやな」と、この「ちょうど赤ちゃん」というのは、こんなに人を幸せにする存在、それが「赤ちゃん」という言葉にぴったりだなと、「赤ちゃん」という言葉の服がこんなにみんなを笑顔にする、この命とぴったりの言葉だなと学習するわけです。子どもは言葉をただ辞書で覚えるように、ドリルで学ぶように学んでいるわけではないのです。たくさんの感情体験と一緒に一つの言葉を身に付けていくのです。「犬」という言葉にしても、何度もかまれた体験がある子は、かまれて怖いという体験と一緒にその言葉を身に付けるわけです。リンゴ一つにしても、絵カードで覚えているわけではないのです。みずみずしいリンゴを食べて、あのジューッという感じが何かたまらなくおいしいねとか、そういう感覚と一緒、しかも誰と食べたときにこんな味だったよねという、それと一緒に子どもは一つ一つの言葉を学んでいくのです。

2-2. 子どもの願いと大人たちが伝えたいものがきちんとつながるとき

小さな子どもたちがしゃべれるようになるときから始まって、たくさんのことを考えながら言葉で表現できるようになっていく。乳幼児期はまさにそういう時期なのですが、そのときにいっぱいの感情と一緒に言葉を自分のものにしていく。その子どもたちと一緒に生きていると本当に面白いことだらけだよねと僕は思います。保育者の皆さんは本当に幸せな人です。なぜかというと、そういう子たちと一生一緒に生きて給料をもらっているのですから、だから、こうやって面白がっていて退職まで生きていればいいわけですから、こんな楽しい仕事はないわけではないですか。

子どもたちの中では毎日のようにこうやって物語が生まれているわけです。そのことをあきもせず彼らは一生懸命生きているわけです。大切なことは、子どもの中に起きるこういうドキドキするような小さな物語と保育実践がどういう接点を持っているかということ、それをぎりぎりのところまで考えなくてはいけません。それをやっていると、子どもの中の願いと大人たちが伝えたいも

のがきちんとつながるとき保育は面白く展開していくのです。小さな子どもにしても、４歳、５歳の子にしても、子どもの中に起きる物語と、そして、保育者が子どもに伝えようとして子どもの中に培おうとしている思い、それがどんな接点を持ちながら毎日の園生活になっているか、本当にそれが大事だと思います。

僕は子どもの物語を作っていくことだと考えながら保育のことを思ってきたのですが、ただ面白がっているだけ、そんな簡単にはいかないわけです。僕は最初に「子どもを育てるということは、子どもの中に喜びと希望の物語を創造すること」という副題をここに書きました。保育実践を営むということは、子どもが毎日生きていることを面白いと思い、うれしいと思いながら生きる感覚、そして、あしたという時間に対して期待を持つ感覚、この二つをきちんと育てることが私たちの仕事だと思います。そして、それができていると保育は面白くて仕方がない。保育者が保育を面白いと思っているとき、子どもは生きていることが面白くて仕方ないわけです。生きるということそのものが自分の人生の中に喜びと希望を育てるのです。そして、その希望と喜びの原体験が育つのがこの乳幼児期ですから、毎日の保育実践で一体どんな喜びや希望を私たちは子どもの中に紡ごうとしているのか、それができているのか、これが保育を見直していく私たちの視点になっていかなければいけません。

３．集団の中で、扱いの難しい子どもたち

3-1．２歳児の荒れ方と５歳児の育っていない姿がつながる

現実には、この20年の間にそんなきれい事では終わらない子どもたちの苦悩の姿が現れるようになってきました。これは『対話的保育カリキュラム』という本の中に書いた文章ですが、「集団の中で、扱いの難しい子どもたち」と書いてあります。子どもの中に本当にすてきな物語が作れるといいのですが、実際にはこの20年の間、僕は保育の難しさについていろいろなところで相談を受けてきました。「気になる子ども」というキーワードが出てきました。それは障がいを持っているわけではないのですが、今までの保育ではきちんと変わってくれない。仲間と一緒に活動することが困難、そういうタイプの子どもを保育者たちは「気になる子」と言い始めました。「荒れる子」、「キレる子」、「気になる子」というのでいろいろな話題がありました。でも、僕自身は「気にな

る子」と考えること自体も本当は見直してみたいという気持ちはあります。

ただ、いろいろな相談を受けているうちに気付いたことがあります。それはこの20年間に今までの保育の難しさを感じる年齢がちょっとずれてきた感じがします。３歳児が難しいというのは昔から難しかったのです。でも、３歳はまだいい方で、今、保育者が一番苦しみを感じているのは年長クラスです。５歳の子が育ちきらないという悩みが一つ大きな悩みです。僕が一番相談を受けるのは、５歳児のクラスでどうしても集団を乱す子がいて、この子がいるがためにこの集団保育が全体的に総崩れという状況をどう解決したらいいのか、その相談がかなり深刻な形で出てきました。「障がいを持った子がというのならこっちも配慮の仕方があるし、あきらめもつく。でもこれが普通の子なのですよね」と言うから、「みんな普通でしょう」と僕は言うのですが、この５歳の保育が私たちが期待しているように年長らしく育ってくれない。年長らしくというのは、年長は集団の力がぐっと変わってくる時期です。３歳、４歳の奔放な集団とは違って、目的に向かって、価値に向かってぐっと背伸びし合う。そういう集団保育の仕上げのイメージが私たちの中にあるのですが、どうしてもそれをやろうとすると逃げ回り、「やらない」と言って抵抗する子がいて、その子に乱されているうちにクラス全体のエネルギーが落ちてしまう。そういう５歳児らしく育ってくれない５歳児集団、この悩みが一つです。

もう一つの悩みが１～２歳児のクラスの子どもたち、満年齢で２歳の子どもがいるところです。３歳になるとまだ言葉が通じるのですが、いっぱいしゃべる割には言葉がなかなか通じない１歳児、２歳児クラスが落ち着かない。というか、保育者が疲れ果てています。以前は２歳児のクラスと５歳児のクラスは保育をやっていて天国みたいでした。５歳児は誇りの対象でした。２歳児はかわいさの対象でした。２歳児の子と１日保育するとそのまま家に連れて帰りたいぐらい、それぐらいかわいくて、１日いるだけで幸せになり、１年一緒にいると本当に自分の子よりかわいいというぐらいに２歳児のクラスの保育者を再生させてくれました。２歳児を見て子どもたちのかわいさを感じ、５歳児を見て子どものエネルギーの素晴らしさを感じ、２歳児と５歳児を担任すると保育者はいつも元気になっていました。ところが、最近５歳児で疲れ果て、２歳児でショックで立ち上がれない、こういう保育者が増えています。なぜだろうと思いました。

５歳のことをずっと考えているうちに、群馬県のある園で２歳児の保育がめちゃくちゃという園長の相談で行きました。園長先生から電話がかかってきて、「今年の２歳児はめちゃくちゃです」と言うから、「どうしたのですか」と聞くと、「４月のときの担任が４月の半ばで自律神経失調症で倒れてしまって、代わりに入った人が半月持たずになかなか補充ができないで、保育者がばたばた倒れています。クラスは落ち着かないし、保育者はいなくなるし、大変なのです。一度見にきてください」と言うから見にいったのですが、大変な園でした。

２歳児を朝から見ていたのですが、いるだけで疲れます。うるさいというか、部屋の中が騒然としています。騒然としながら、こっちでかみつき事件が起きたら「わー」と泣くわけです。泣くと確かに保育者がいっぱい集まってくるのですが、集まってきたと思うと、こっちでけんかが起きるわけです。このけんかにまた対応する保育者の声がうるさいもので部屋中が騒然としているわけです。うじゃうじゃいるので、園長先生に「何人一緒に生活しているのですか」と聞くと、園長が「今ちょうど24人です」と言うのです。「１部屋で24人も入れているのですか」と言ったら、「そうです」と言うのです。「どうやって保育しているの？」と言ったら、「６対１は守っていますから、いつも４人は保育者が部屋の中にいるようにします」「それで大人が４人もいるもので人口密度が高くなってしまって、子どもの生活スペースがなくなっているのだね」と言いましたが、「それは仕方がないのです」と園長は言っていました。そこは24人の子どもと４人の大人が一緒に生活するだけの広い空間かというと狭い空間なのです。「こんなところにこんなに押し込んでは駄目でしょう」と言ったら、「入ってきました」と言うのです。「誰が入れたの？」と言ったら、「私です」と言っていましたから、もうどうしようもないのです。

でも、このクラスの様子を見ながら思いました。この20年間確かに保育の条件が１～２歳児のところが一番悪化しています。１～２歳児のところの待機児が一番多いので、定員超過分はそこにいっぱい入っています。４～５歳のところは人数が少なくなっているのですが、なかなか育ちにくい。そういうことを考えると、２歳児の荒れ方と５歳児の育っていない姿がつながっているのではないかと思いました。

僕が20年前に埼玉県のある園で相談を受けた事例、これが最初に５歳児で扱いが難しいと対応したケースです。実際には４歳の後半でこの子と向き合った

のですが、４歳半になると子どもの集団が急に変わってきます。それは４歳児の半ばを過ぎると子どもの中に大きな成長が起きるからですが、このクラスは４歳の後半になってBちゃんという子どものことでこのまま年長クラスが崩れるのではないかと予測をさせてしまうぐらい大変な状況でした。先生の書いたレポートでは、ふらーと部屋に来ると、通りすがりの女の子をたたいたり、髪の毛を引っ張ったり､「何々のばーか！」と罵声を浴びせて泣かすことが多かった。そのたびに「Bくんが！」と泣いてくるので、どうしても「Bくん、どうしてやったの？」「Bくんがたたかれたらどう？」と考えてみるような話し掛けをしてきたつもりだが、その場は一応神妙にしていても、すぐに「へっ」というふうに表情を変え、さーっと走り出していく姿に「まったく」という気分になることも多かったと。

実はこの子は３歳児のときにこの園に転園してきました。東京で０歳から保育を受けていた子なので生粋の集団保育っ子です。０歳から４歳まで生きてどうして仲間と一緒に過ごせないのという感じですが、背景に複雑なものがありました。東京の園から埼玉の園に引っ越してきた理由は、父親の虐待がひどくて夫婦は子どもが２歳のときに離婚した。それが実はきっかけでした。実家に帰ってきたのです｡父親の虐待がひどくてという辺からいろいろな話を聞くと、深刻な状況だったなとは思うのですが、ちょうど１歳児、２歳児とのときは東京の園にいました。この先生の前のクラスの３歳児のクラスの担任が、初めて来たこの子がめちゃくちゃで集団保育を受けてきた子とは信じられないような荒れ方を示すので、一体どのように毎日生活したのかよく分からないから前の園に電話をしました。

東京の園に電話をすると、出た担任が「何々ちゃん大変でしょう」とまず言いました。「大変なのは仕方ないのですが、１年間どんな生活をしたか教えてくれますか」と言うと、「とにかくこの子がいるとめちゃくちゃになってしまうので、かみつくは、踏みつけるは、本当に大変なのです」「そうですか。それでどういう保育をしていたのですか」と言うと、「とにかくほかの子に危害を加えないように、この子が暴れないように、いつかこの子が仲間の中に入れると思って、この子の機嫌を損なわないようにやりたいようにやらせておりました」と言うので、「そんなやりたいようにやらしていては駄目でしょう」と言いながらも、「そうですか、それでけんかとかは」「かみついたり、物を投げ

たり荒れるのですよね」と言うのです。「荒れるのですよねと言われても困るのですけど」と言いながら、「食事などは一緒にしたのですか」「一緒にしないのですよね」とこんな感じで、集団の中にいるのですが、園全体で見ましょうというので、けがをしないようにだけみんなで見て、ほかの子に危害を加えない、これだけがこの子を見るポイントだったというのです。

それで、電話してもらちが明かないというのでその子を見たのですが、３歳児のクラスがこんなものではなくてもっとめちゃくちゃだったわけです。つまり本当に殴ったり、通りすがりにぽんと突き倒したり、こういうことばかりで、先生が一生懸命向き合うのですが、保育者をたたいたり、髪の毛を引っ張ったり、こんなことを繰り返すわけです。４歳になると保育者に向かってたたいたりもするのですが、口が多くなって、「何とかのばーか」とか、保育者に対して「ばーか、ばーか、くそばばあ、くそばばあ」とか、こういうことを急に言い出すのだそうです。だから、この子は何なのだと思いながら、保育者たちが何度かキレながら一生懸命向き合う。

夏のこんな事例があります。「夏祭りの前、うちわ作りをしようといすに座っていたら、Bが急に席を立って、Aが座っていたところに座ってしまった。泣き出したA、すると突然、顔面を連打。『やめて』と声を掛けたら髪の毛を引っ張りだし、手を離そうとしたら今度は口で髪の毛を食いちぎる。あまりに強い強打で鼻血を出してしまったA。あまりの暴力に担任である私もショックを受けたが、『自分がやられたらどう？』と話すと、直後にAに謝っていたが、許す気がしなくて『ごめんて言えば、何をやってもいいんじゃないんだよ!　自分がやったことがいいことかどうか考えてごらん』ときつくしかってしまった」。逆効果だったのですが、でもこう言いたくなる気持ちは分かります。

そういう状況でこの４歳の担任とこの子との関係が崩れ、クラス全体ががたがたになってしまう。これがこのまま年長まで行ったら大変なので、どんな保育をしたらいいですかという相談でした。どんな保育といっても難しいと思って、僕はそのときにこの先生といろいろと考えたのです。「この子は何が問題なのですか」と言ったら、「実はよく分からないのです。だけれども、友達とかかわる力が弱いのです」「それは見たら分かります。友達とかかわる力が弱いから集団保育で仲間と生活しているのでしょう」「そうです」「だから、力が弱いということはそんなに問題ではなくて、仲間と一緒に生活することを学ぶ

場が集団保育なのだから、そのこと自体はそんなに問題なのではないのではないですか」と言ったら、「それが普通と違うのです」と言うのです。「どう違うのですか」と言ったら、「そんなことが分かったら相談なんかしません」と怒りだすのです。そうだろうなと思いました。

僕は、人とかかわる力が弱いということ自体は普通のどの子にもあるのだろうと、だから、この子の中の特別な問題ではないのだろうと思いました。それが発達障害というのだったら別ですが、そういう問題を抱えているわけではない。実はもうちょっと違うところに問題があるのではないかと思いました。ずっと見ているうちに感じたことは、「人とかかわる力の弱さ以上に、本当は４歳の後半になって学ばなければいけない自分自身とかかわる力が弱いのではないですか」と言ったのです。そうしたら、「自分とかかわる力とは一体何ですか」とまた言い出すものですから、これが自己内対話能力といって、実は２歳のころに一番大事なものがあるのですが、そのころの崩れが４～５歳に現れているのかもしれないと思いました。

3-2. 自己内対話能力が育つ道筋

実はこの20年、そういう事例にいっぱい向き合ってきて、ますます確信を強めるようになりました。５歳児クラスの子どもたちの荒れは、ほとんどが２歳児のころの生活の崩れが放置されたことに原因があるような気がします。なぜなのかというと、この自己内対話能力が育つ道筋を考えてみると分かります。

これも先ほどの『対話的保育カリキュラム』に書いた子どもで、もっと深刻な事例でした。５歳の子で、この『対話的保育カリキュラム　下』の方に紹介した子どもですが、この子の場合は、実は５歳児で18名のクラスだったのですが、園長先生の手紙によると、その18名のクラスはこの子が６月から暴れ始めたことをきっかけにして、運動会の前には４人がかりでないと保育ができないという大変な状況でしたと書かれていました。「18名の５歳児を４人も保育者がいるなんて信じられません」と言ったら、「信じられないことが起きているのです」と園長は言うのです。それで、一体何なのかなと思って行きました。

実は、この子の場合も大変だったのです。その大変さは園長先生の手紙に書かれていましたが、担任のレポートにはこのように書いてありました。Fちゃんと彼女は書いていましたが、「園ではこんなことでと思うことですぐにキレ

て、物を壊し、投げ、人に当たったりします。27kgと体も大きく、友達を蹴っては泣かし、保育者の髪の毛を引っ張ったり、頭突きをしたり、パンチをしたりと、とにかく目を離せない状態です。とにかくこんなときは止めて抑えるしかないのですが、そうすると『おれを階段に連れていけ！　飛び降りて骨を折るから、全部の骨を折って死んでやるから』と命令口調で言うのです」。この口癖がこの子の毎日の日課のように出てくるのです。「おれを階段に連れていけ！　飛び降りて骨を折るから、全部の骨を折って死んでやるから」と言うのです。この「死んでやる」という叫び声がこの子の口から毎日何度も出てくるというのです。「どうせおれなんか、どうなってもいい」と言って、「ハサミ持ってこい！　おなかに刺して死んでやる」と保育者に命令するのです。「死ぬなんて言っては駄目だよ」と言ったら、「死んでやる」とまた言うのです。この言葉を毎日のように聞きながらこの先生は思ったそうです。何か分からないけれども、この「死んでやる」と５年間生きた子が叫ばざるを得ないしんどさを考えたら、私がこの子と向き合うことの大変さを超して、この子の中に何か得体の知れない不思議だけれども自分でセーブできない何かが起きているのだと思うと、私が何とかしてやらなければいけないと、５年でこんなことを語らなければいけないこの子のつらさは一体何なのだろうと、それを考えることが唯一この先生の頑張りのエネルギーでした。まだ３年目の先生でしたが、本当によく１年間頑張ったと思います。

でも、頑張っても頑張っても育ってくれないのです。保育者の善意だけでは子どもは成長しない。どうしましょうという相談でした。この事例はうまくいきませんでした。理由は、夏に園長先生から相談を受けたのですが、でも忙しかったので１月ぐらいなら行きますと、ここまで重大だと思わなかったのです。１月にこんな話を聞いて２か月後に卒園でしょう。２か月でこの子を変えるだけの妙案はありません。でも、やれることはあるはずですというので頑張ってもらいました。

この子の事例は一体何だったかというと、この子も父親の虐待を受けていました。虐待を受けていたことが直接の原因ではあるのですが、問題は地域の人の対応もあって、６月、この子が荒れ始めたときに夫婦が離婚を決めて父親が別居したのです。つまり、今まで虐待し続けてきた元凶はいなくなったのです。家からいなくなったから、この子はこれから自分をもう一度つくり直して

いくチャンスだと思って、園の側も親たちも一緒になって頑張ろうねと話した矢先に暴れ始めたのです。理由は、中学１年生のお兄ちゃんがいたのです。中学１年生と年長の兄弟なのですが、13歳のお兄ちゃんが13年間自分を傷め続けた父親がいなくなったこの恨みを母親にぶつけたわけです。そして、家の物にぶつけたわけです。そして、このFくんにもぶつけたわけです。すさまじい家庭内暴力が始まって、父親のときよりもひどい状況になって、家が全く落ち着かない状況になったわけです。そして、やっと４～５歳になって父親の暴力からは離れていくのですが、誰が自分の心を受け止めてくれるのかというのでさまよっているときに、この先生が懸命にこの子を受け止めてくれるわけです。

この先生が一生懸命向き合ってくれるのが気持ちがいいのです。だから、困りながらでも私のことをきちんと見捨てないで聞いてくれる、この人との関係が命のように大事になってきます。先生を困らせながらでも１対１で向き合ってもらう快感、そして、とことん自分のことを大事に考えているその快感を感じると、この先生を離したくなくなるのです。独占したいような気持ちになります。でも、集団保育でみんなの中に生き、みんなの先生として動いていると腹が立ってくるのです。だから、みんなが気持ちを一つにすると、物を投げたりしていらいらをぶつける。それがたまたまほかの子の頭に当たったりして、ぎゃーと泣き出したりする。すると「何々ちゃん、どうしたの」と言って怒られたら、また顔が暗くなるわけです。この人は僕をきちんと受け止めてくれないのではないか。そうしたら、この先生はやっと心を開きかけて私を求めてきているのに、ここで関係を崩してはいけないと思います。

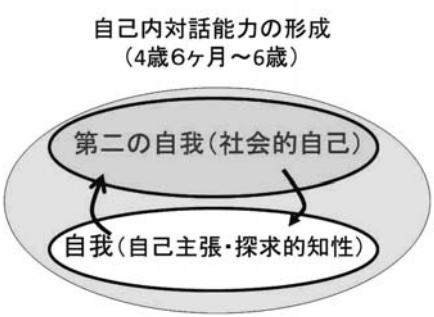
それで、ちょっと言葉を変えながら、この子をきちんと受け止めようとまたしてしまうわけです。そんなことを繰り返しているうちに、トラブルを起こせばこの先生を独占できるということを学習してしまうのです。だから、あえてクラスで問題行動を自分が起こしながら先生との１対１の関係をつくる、最初はしかられてもその後めちゃくちゃ優しくなる、そういう保育者の習性を学習してしまうわけです。だから、丁寧に扱えば扱うほど問題が深刻になり、仲間の一員に返ってくれないのです。ちょうど野生の動物を保護して、一生懸命私の子のように育てて野生に返すことができないように、この子が特定の保育者に対するこだわりから自由になれないのです。ここを卒業できないのです。どんなに頑張っても、頑張れば頑張るほど混乱する。その問題をこの子の場合も

先ほどの埼玉の子の場合も似たような状況でした。

このクラスは実は、３人被虐待児がいたのです。18人中３名が被虐待児として地域で対応して、このしんどさの中で起きた問題でした。だから、この子が暴れだすとあとの二人の虐待を受けている子が「おれだってちゃんと見ろよな」という形で暴れ始めるわけです。だから、一人の保育者が１対１で見ている、この関係をこの子ともこの子ともつくって、その努力を繰り返すのですが、この先生がつらくなるのは、３人の関係をつくっているうちに15人と自分の関係が崩れて心が離れていってしまう。クラスがクラスとしてまとまらない感じは、１日そういう保育をした後に私は何をしているのだろうという自分を責める感覚になってしまうのです。仲間が気持ちを一つにする、そういうことすらできない集団保育の保育者は一体何なのだろうとこの人は責めていくわけです。責めるのだけれども解決はしない。それが運動会の前になると本当に先生が困るのを楽しむようにやってしまうのです。そういうものに振り回されながらの１年間だったと言うのですが、よく頑張ったなと僕は思いました。

3-3. 子どもの自分づくりと保育の構造

この子たちにどんな問題が起きているのかということをいろいろと考えました。結論的には一つのことを考えるしかないと思いました。先ほど言った自分とかかわる力、これを僕たちは自己内対話能力という言い方をしますが、基本的には自己内対話能力はこういう図で表現すればいいかと思うので書きました。これが『子どもの自分づくりと保育の構造』という本を書いたときに描いた図です。



大きい丸が自分です。その中に二つの丸があります。これが自我の世界です。実は赤ちゃんから６歳まで２種類の自我を子どもはつくっていきます。下の自我が「自己主張」、これが一般的に自我といわれる世界です。１歳半から３歳のころに拡大する自己主張する自我の世界、この自我が「社会的自己」と書かれています。これは順番とか、友達だよねとか、仲間として社会的存在である自分はどのように生きなければいけないのか、これを知性として、言葉として身に付けるものです。物を取り合うときには順番にするとか、両方が欲しいときには「貸して」と頼むとか、そういう社会的なルールを言語で身に付ける。これが第二の自我の世界です。下の自我は、体の中にこうしたいのだよ、あそこへ行きたいのだよ、僕はこれは嫌なのだよという、そういう自分の要求を表現する力が育ってくる。順番は青が先というのは分かりますね。先ほど言った１歳児、２歳児がそんなに社会的ルールを守る言語を持っているわけではない。自我の世界がまず大きくなります。

乳児のころは別にしますが、まず幼児前期といわれる１歳半から３歳。１歳半ばが自我の誕生の時期と僕たちは考えます。それは自己主張が強くなる時期、体の持っていた要求に言葉を添えて、「僕が」「僕が」とか、「僕の」「僕の」とか、そのように要求するようになるときです。だから、自分はこうしたいのだという要求がまず強い自己主張とともに現れるのが１歳半から３歳の時期です。そのころにわずかに第二の自我（社会的知性）は人と共感する心地よさを持っているだけです。だから、歌を歌ったり、手遊びするとちょっと最後合わせてくれたり、にこっと笑ったらにこっと笑い返してくれるとか、そういう人との共感する世界が育ち始める時期です。だから、絵本を読んだら絵本の面白

いところでけらけらと笑ってくれたりとか、そういう関係が育ち始める時期ですが、大事なのはこの時期です。「自己主張」が強くて、やっと第二の自我といわれるところの芽が育ち始めたときにどんなかかわりをするかによって５歳児の育ちが決まってきます。

実は自我が出始めるときは扱い難い時期なのですが、その時期にとことん自我を受け止めてやることが大事です。人間は自分の中にある要求はとことん要求を表現していいのだよと社会に受け止められなければいけない。あなたが出した要求はとことん私が受け止めてあげるよ。そのことによって受け止められる権利を自分が獲得する。「要求を表現する権利」、「その表現した要求を受け止められる権利」、この二つの権利を持つと子どもは自分の思いをいっぱい出し、それを受け止めてもらうことの心地よさを知った子だけが「相手の思いを自分の体の中に刻み込む権利」、三つ目の権利を獲得していく。１歳半から３歳の時期にこの三つの権利を保障される。それが子どもの権利を保障する保育のポイントです。つまり言いたいことは言いな、やりたくないことは「やりたくない」と言いな、それはあなたの権利だよということ、それは私がきちんと受け止めてあげるからという、その受け止められる権利、そこまで感じた子は、自分の思いをとことん受け止めてくれた人の言葉を聞こうとするわけです。だから、「こういうときは『貸して』と言うのだよ」と言うと、「して」と言うわけです。そういう世界まで連れていってもらうと、「自分の思いを出す権利」、「受け止められる権利」、「相手の思いを自分に刻み込む権利」、この三つの権利を獲得することになります。

ところが、ここのところで自己主張し始めた子どもに対して親が耐えられなくなっているわけです。虐待が一番深刻になるのは、このときにかわいく思えないとか、産むのではなかったとか、こういう感覚が広がる。扱いにくくなり、わがままになります。そのわがままに対して親がキレてしまうわけです。頭ごなしに否定し、２歳の子どもの自己主張に２歳並みに向き合っています。だから、子どもは余裕がなくなってしまう。この人の前では自己主張をしてはいけないのだと思います。

そうかと思うと、中途半端に勉強して、「子どもを大事にしてくださいね。自己主張は権利ですから」と言うと受け流し方の親が出てきます。何でも聞いてしまうわけです。例えば「何々ちゃん、ご飯食べるよ」「嫌」と言うのです。

「嫌」と言われると本当にどうしようもないです。「食べなさい」と言ったら「嫌」と言うし、「どうして食べないの」と言うと「わーん」と引っ繰り返るし、このころの駄々こねは耐え難いぐらい大人にとって苦しいです。でも、そういうことをします。そうしたら、「もういいわ。あなたの権利だから、あなたの要求どおり食べなくていいよ」とつい言ってしまいます。そして、「寝るよ」と言うと「寝たくない」と言うから、「寝たくないのはあなたの権利だから無理して寝なくていいよ。何がやりたいことがあるの」と言ったら、「ビデオが見たい」と言うから、「ビデオが見たいのだね。あなたの要求だから見たいだけ見なさい」と見せていると、ただ自分のわがまま三昧な子になります。この時期に子どものやりたい放題にさせると、自分のやりたい放題に世界は生きていいのだと学び、頭ごなしに否定すると自我を受け止められる心地よさを知らないまま終わってしまう。大事なのはきちんと受け止めるということです。

このきちんと受け止めるということは、この時期に二つのことをやれば受け止めたと言うことが大体できます。例えばご飯を出したときにニンジンが出てきて、嫌いだったら「ニンジン嫌い、嫌い、嫌い」と子どもは拒否の言葉を言います。そのときに保育者も親も二つのことをやってください。それは簡単です。「何々ちゃんニンジン嫌いなのだ」と、「嫌いだ」と言ったら「嫌いなのだね」とまず受け止めてください。だけれども、その受け止めるときに子どもの声よりもちょっと小さな声で、子どもよりもちょっとゆっくりのスピードで言葉を返してやってください。この二つができていると受け止められているという感じになります。これはキャッチボールと一緒ですから、投げられたボールはスピードとしてぱちんと入れなければいけません。子どもが投げたボールよりも速いスピードで打ち返してはいけないのです。だから捕る感覚。分からない人は、大人でも一度ボールを投げて人の球を捕っていく感じを学んでください。きちっと受け止めるときはいい感じです。自分のボールが受け止められると絶対に相手のボールを捕ろうとします。だから、心地よく受け止められたときには「こっちに投げてごらん」と偉そうに言うのです。２歳児もそうです。きちんと受け止めてやるというのはおうむ返しでいいです。子どもが「まだご飯食べたくない」と言ったら、「ああ、何々ちゃん、ご飯食べたくないんだ」と言ったら、「うん、僕は食べたくないの」と偉そうに言います。この偉そうに言うときがポイントです。彼らは威張っているときは余裕があるとき、その

余裕があるところに「でもね」と返してやりましょう。そのところに「では、これをしてからこうしようね」という見通しのある言葉を掛けてやりましょう。受け止めて、切り返す、受け止めて、意味付け直す、そういうかかわりをこの時期にどこまで丁寧にするか、それが子どもの自我形成にとっては大事です。

実はこのときに１年半、丁寧に１対１のかかわりで自我を受け止めて返すというかかわりをしてもらった子だけが、３歳児、４歳児になると自分の中に自己主張する世界と同時に、こうしなければ駄目だよねという第二の自我といわれる「社会的知性」を確かなものにします。３歳児、４歳児は、自分の要求を表現する言語と世の中のルールを語る言葉と両方きちんと持ちます。持つけれども、彼らはいつもこの二つをつなげながら生きることはまだ下手です。聞けば、こうしなければいけないとよく知っています。でも知っているようには動かない。これが３～４歳児の腹が立つところです。

３歳児の揺れる自我は面白いのです。第二の自我もあるのに、自我しか出ない部分と第二の自我の塊みたいなところを時間差で生きています。自分がやりたいと思ったら第二の自我は忘れて自己主張の塊になってしまうのです。ところが、他人の悪事だけは第二の自我でちゃんと見ます。だから、他人を批判するときだけは冷静に「何々ちゃん変です」と言うのです。あんたも十分変でしょうと思う子が結構こういうことを言うのです。「あの子わがままです」とか、こんなことを偉そうに言うのです。他人の悪いことだけはよく見えるのです。そして、自分のやりたいことは自我で出るのです。この自分のことは自我、他人のことは第二の自我、ここが時間差で出て時々つながるのです。時々つながるのだったらずっとつながってほしいと思いますが、時々つながるのは宝物のように大事にしてやってください。揺れながら時々つながる。でも、１回つながったからといってずっとつながるわけではない。この得体の知れない三つの自我を一緒に共存させているのが３歳児です。

なかなか二つの自我がつながらないあなたを受け止めながら、あしたこそこの世界に行くといいよねと丁寧にかかわる３歳児、４歳児の担任と一緒に生きているうちに、４歳半になると子どもの中に「僕はこうしたいのだよ」という世界と「でもこうしなければ駄目だよね」という自我と第二の自我を自分の中でつなげる力が育つ。これを自己内対話能力と言います。この自己内対話能力こそが６歳までに獲得しなければいけない人として生きる力です。なぜかとい

うと、心地よく自己内対話できる力があるということは一生の財産だからです。つまり、４歳半から５歳に獲得したらこの力は死ぬまで私たちが持って生きるのです。もちろん自我の世界はより豊かにします。やりたいことはもっとたくさん自分の中に形成します。そして、死ぬまでやらなければいけないことを学び続けるわけです。

私たちはこの社会をどう生きなければいけないのかというのは、大人になってもどんどん勉強していくのです。原発の問題がどう収束すればいいのか、専門家に任せておけないと思ったら、私たち自身が学びながら自分たちでどうあるべきかという社会的知性を鍛えるしかないのです。民主主義の担い手は自分の体の中にある要求を語る人であると同時に、この社会をどうするかということを語る人です。それをつなげながら自己決定していく人が社会を構成する。これが民主的な社会の条件です。民主主義を成り立たせるためには、４歳半のころに形成される自己内対話能力がすべての人に安定的に保障されることが大条件です。ところが、この自己内対話のところまで子どもがうまく育っていないのです。だから、５歳児になってこれが育っていないことがすごく気になってしまうわけです。

５歳児でどのように育っていないかというと、本当はこれが育つと、仲間で共通の目標、仲間で共有する価値に向かってみんなが背伸びし合っていく活動へ保育は持っていけるはずです。５歳児は集団の価値と集団の目標に向かってそれぞれが自分らしく背伸びをしていく、そういう集団に高めなければいけない。この前提は一人ひとりが自己内対話する力が育っていることです。ところが、一人ひとりの自己内対話能力の弱い者が集団をつくるので、目標を提示したら保育者にやらされている感があり、拒否するわけです。そして、子どもに任せたらだいいかげんなことをしてしまいます。この力が育たないのです。20年前の５歳児の方がうんとこの力を持っていたような気がします。

僕はこの時代に保育の中に大事な力を育てたいと思うのですが、今、三つのタイプの子どもが増えてきた気がします。Aタイプは超わがままタイプ、まさに５歳児になっても自我の塊、２歳児並みのわがままさで生きています。自分の言うことを聞かないと、最後まで抵抗し続けるというわがままな子がいます。「あなたもう５歳でしょう」とつい言いたくなってしまうようなわがままタイプの子どもです。

それから、もう一つ増えたのが超お利口さんタイプ、自我が弱くて第二の自我の強い、人の顔色をいつもいつもうかがうタイプの子どもです。過剰適応気味で、褒められ、認められないと不安になるタイプの子です。いつもいつも大人に評価される、そのまなざしが気になる。だから、大人に認められるために、「お母さん、こうしてほしいのでしょう」とか、「先生、こうしてほしいのだよね」と、こういうことばかり気を使う。自分がこうしたいのだということを強く主張できない。今、いろいろなタイプでこれが出ています。超早期教育を受けた子どもはこうなってしまいます。１～２歳児のころに方程式が解けるような子が育つのですが、そういう子どもたちがどんどんどんどん出された問題を解いていると、「何々ちゃんお利口ね」と認められると、その「お利口ね」という言葉のために頑張る、頑張るから褒められる、こういうことを繰り返すうちに、大人が提示する問題に向き合い、大人の課題に答えていることの快感を知るけれども、自分が本当に体から出る喜び、要求を表現することの苦手な子になってしまう。こういう子は部屋に置いてもじゃまではないです。賢くていい子です。でも、何かかわいくないですよね。保育者は嫌いな人が多いです。どっちかというと保育者は超わがままタイプの方が好きです。ただ、自分の部屋には入れたくないです。隣の部屋で暴れている限りは大事にしたいですね。「まあ、何とかちゃんが」と言うと、「でも先生、あの子結構いいところがありますよ。かわいいところがあるのですから」と守りたくなるタイプです。でも自分の部屋にいるとじゃまです。この子はじゃまではないけれどもかわいくない。抱きしめたい感覚が出ないです。だからあまり好きではないです。こういう子は時々便利ですよ。私たちの要求を先取りしながら応えてくれます。

この２タイプが増えているのですが、問題はこの２タイプだけではありません。一番深刻なのは、古典的な複合型、これが普通の子です。普通は親に自我をいっぱい出してわがまま三昧、家に帰ってやるのですが、わずかにある第二の自我を園に来たら最大限に出して生きるのです。そうしないとこの社会では生きられないとよく知っているのです。だから、保育者に認められるために第二の自我を園の中では一生懸命生きるのです。背伸びしながらみんな頑張って生きているのです。だから、家に帰ったら疲れてわがままな子に戻ってしまうのです。それを受け止めるだけの力が親にはあります。そうしたら、ここでもらったエネルギーでまた頑張るのです。これが４歳ぐらいになってくると、

ちょっと第二の自我を家でも出してみるかと頑張ってみると、「えらいあんた大きくなったね」と認められるから、それぐらいはできますけれどと思うわけです。そうすると、園に行ってもだんだん慣れてくると自我が出せるようになるので、親に受け止めてもらう自我の世界と、保育者がつくるみんなという世界が自分の中でつながってくる。これが４歳後半ごろに二つの自我をつなげる原動力になるのです。保育者が両方育てるというよりも、親たちが自我の世界をきちんと受け止めてくれ、みんなの世界を保育者が育てる。だから、２歳のころから「みんな」という世界が成立したのです。みんなと一緒にやるのはこんなに面白いねということを学ぶ時間帯と、「僕が」「僕が」という世界をきちんと出していい時間帯と両方持ちながら自我形成をしました。だから、保育所に来ている子どもたちが早くこの二つの世界を形成し、そして、つなげることができたのです。幼稚園の子よりもそこがうまくいったというのは、２歳のころにこっちを学ぶ時間が豊かにあったからです。

だけれども、これは自我を受け止めてくれる関係が親子にあるからうまくいっていたのです。そこが崩れてしまうと、誰か僕の自我を受け止めてよと２歳のころからもがいています。それが集団の規模が大きくなると一人ひとりの自我を受け止めるだけの余裕がこっちになくなってきます。だから、受け止めて返すという関係を誰もやっていないので、命令されるか、わがままなまま勝手に振る舞うか、この二つの時期を大変な状況で生きている子どもが増えています。だから、５歳のころに受け止められなかった子どものジレンマが現れてくるのです。つまり、矛盾が５歳になって表面化します。年長になってこの荒れた姿をどうしても受け止めるという関係だけではもう修復できなくなって、保育者もどうしていいか分からなくなる。そこのことが５歳児に現れています。

だから、最近、僕は年長の担任で悩んでいる人がいると言うのです。「周りの先生たちが『今年の年長さんどうしたの』と言うのですよ。優しいのですけれども冷たいのです」とよく言いますね。そう言われたら厳しいと思います。焦ってしまいますから。僕は、「先生、よく頑張っていますよ。先生のせいではありません。年長になってこの子らが急におかしくなったわけではないのです。５歳児で苦しんでいる一番の原因は２歳児のときの担任がサボったのです。だから、２歳児の時誰が担任か探してください。そして、その人を恨んでください」と、恨んだって解決しません。だから、やらなければいけないことはや

らなければいけないのです。

でも今、保育所は２歳児が来てくれるから、僕はこの時期をへそのように大事にして園全体の保育をつくり直していきたいと思うのです。ここをきちんとやれば５歳までこの問題を引き延ばすことはない。だから、２歳児に最も優秀な保育者を配置してください。子どもの思いを受け止められる人を配置してください。いなかったらどうするか、そのときは知りません。

３～４歳も大事です。２歳でやり過ごした部分を修復できるラストチャンスが３～４歳だから、３～４歳もつながらないあなたを受け止めながら、あしたはつながるといいねというのも、これもやはり第一級の保育者を配置してください。２歳、３歳、４歳とまともな人を入れれば、５歳は何もしなくても育ちます。それでやり過ごした場合があるから年長にもいい人を配置してください。そうしたらもうスタッフがいなくなりますね。０～１歳がその根っこですから、これも大事ですから全部大事になります。

僕は、この自己内対話の問題を頭に置きながら保育をしてみると崩れ方とケアの仕方が分かってくると思います。５歳の保育は難しいのですが、ここまで崩れてしまった子どもを集団としてどうするかは、２歳へ返ることはできません。だけれども、受け止めるだけで解決するなら受け止めてやりましょう。そうではないときはやはり徹底的に５歳児らしい保育をしましょう。

４．虐待の現状

そんなことで二つの事例を言います。去年の夏に大阪の西区で起きた３歳と１歳の兄弟の置き去り事件のルポルタージュをここに書いてあります。この母親がこのように子どもとの関係をつくらざるを得ない状況になってしまったプロセスです。最初の子どもが生まれたときには、自分の生い立ちの問題もあり、うんと幸せな家族をつくろうとこの母親も子育てを始めていきます。けれども、それが崩れていくのですが、その崩れていきながら二人目ができたときに離婚して、一人でこの二人の子どもを育てなければいけない。そういうときに世の中がいくら手を差し伸べようとしても、本当に大事なアドバイスになっていかないのです。そして、最終的に彼女が二人の子どもを置き去りにした事件です。

「洗濯機で娘回す」というのも去年の７月14日に新聞に載った事件ですが、これも本当に悲惨な事件でした。

去年１年間新聞を見ているだけで、質的にもこの虐待の問題が大きく変わりつつあるということを僕は直感していましたが、皆さんもこの前、驚かれたかもしれませんが、先ほど言った90年に始まった虐待調査ですが、90年に1,101件が全国の児童相談所で出した数でした。これが2009年には４万4,210件というデータが去年正式に報告されました。ところが、深刻なのは、去年の秋に正式なデータが出た４万4,210件、これがつい最近ですが、５万5,152件という数になっていました。４万4,200件から５万5,000件というのは、１年間で１万件を超す虐待相談の増加は近年ない数です。普通3,000～4,000件１年間に増えている、これも多かったのですが、急速に１万件を超す１年間の増加率、これは去年１年間が虐待の問題でしてみたら量的にも質的にも大きな変化の起きた年のようです。実はこれには宮城県と岩手県のデータは入っていません。３月の震災の影響でそのデータがまだ集められていません。だから、二つの県のデータを除いて１万数千件が増えてしまいました。これが今の子どもたちが置かれている状況です。

こういう子どもの苦しさと、こういう子どもとかかわることのうまくできない親たちの苦しさ、今、そこに子育ての一番の問題があります。この子たちのもどかしさが集団保育をして仲間と一緒に生きる心地よさまで連れていけない。その悶々とした思いが保育の中に広がっているとしたら、こういう子どもの苦しみを解決する保育制度は何なのだろうという発想で制度設計をしなければいけません。一人ひとりの思いがきちんと受け止められる、その条件を家庭と園の両方につくらなければいけない。親たちのところに子どもを返す政策と一緒に共働き政策をつくらなくてはいけないのです。二人が働く権利は保障しましょう。でも、子どもが親と心地よく生きる時間を権利として保障することも同時にやらなければ乳幼児の保育はうまくいかない。そして、集団も預かればいいわけではないので、府の条例の中では国の基準を大幅に超えるいい条件をつくるということなのです。でも、国の基準よりも悪いものをつくることもあり得るのですね。都市で土地が高いところは特例をするというのは、国の基準よりも悪くてもいいよという基準を条例でつくってもいいよと暗に言っているので、高いところをより豊かにと普通は考えませんよね。広いところはうんと広く豊かに安くつくれるのですが、今のままでいくと都市部ほど条件の悪いところでもどんどん頑張ってくださいねとなりがちですが、こんな時代に都市

部ほど子育ての問題が深刻になっているのですから、こういう親子を救う施策をまともに考えないと未来を託すことができません。６歳までに自己内対話を悶々としながら生きている子が小学校に入って安定的な自我を生きることは無理だろうと僕は思います。

こういう社会的に厳しい状況の中で、保育の政策は一人ひとりを受け止め、仲間が心地よく生きられる。そのためには保育者もうんと元気になって園に行かなければいけません。保育者が疲れ果てながら園に行っているようでは駄目です。だから、うんと休みが保障され、夏休みはみんな取りましょう。みんなでゼネストです。８月は一切保育をしないと日本中の保育者がやるのです。そうしたら９月には仕事がなくなっていたりして。そんなことはないですが、それぐらい世の中に訴えたいと思います。

５．保育の実践

それでも実践をつくらなければ話にならないのです。愚痴っていても仕方がないし、問題を分析するだけでも駄目です。僕は今から二つだけ実践を言います。

5-1．保育者の対話能力

一つは、受け止めて切り返す、この２歳の時期をまずきちんとやろうということで、この原則を学んでもらい、そして、この原則で１～２歳児のクラスを徹底的に保育してもらいました。そのときの子どもとの関係を記録してもらって、私たちの理念は、実は毎日の子どもとの具体的な関係の中でしか表現できないわけだから､頭の中でこの図をいくら描いても子どもが育つわけではない。ではこの図を具体的な実践の中で子どもの育ちの物語とどうつなげればいいのか、それは毎日の保育者の戦いの中でやるしかありません。だから自分の実践を記録してください。そして、記録したものをみんなで学び合いましょうということをやってもらいました。

長野県の保育者が書いてくれた記録でいい記録です。事例「かんじゃだめ！」というものがあります。この先生はよくこれを徹底的に意識しながら子どもとの関係をつくってくれました。こういうことをちょっと丁寧にするだけなのですが、毎日のように気を使ってやりましょうということです。

「食後、食べ終わった子どもたちがままごと遊びをしています。タロウちゃん（２歳１か月）箱積み木の上にコップや皿を並べています。リオちゃん（２歳２か月）箱積み木の上のコップを持っていく」。２歳１か月ですから、食事が終わってコップを並べているのです。それをリオちゃんが取ってしまったのです。「タロウ、『いやー』と言って追い掛け、肩に向かって口から行く」。肩に向かって口から行くというのは「肩をかんだ」と書けばそれでいいのですが、この先生の心理状態が分かります。あーという感じでしょうね。肩に向かって口から行くのです。そうしたらリオちゃんは泣き出し、タロウちゃんも泣き出します。その場合に「食事中のほかの子の援助をしていたため、近くにはいたが、すぐには手が出ず、『タロウちゃん、駄目』と言葉で伝える」。受け止めていないのですが、ここは仕方がありません。「保育士の言葉と同時に泣き出すリオちゃん、タロウちゃん。保育士、リオの肩を見ると、くっきり歯型が残っている」。先生の感想が書いてあります。「しまった。遅かった。今までかみつきなんてなかったから油断していた」、このように普通は書かないのですが、ここの町ではみんな硬い考察を書くので、ここに正直な感想を書きましょうと言ったら、４年間この町に通ったのですが、最初の年に「あー、失敗した」とか書くのです。それが妙に面白かったので、こういう臨場感のある感想を書きましょうねと言ったら、みんなが書くようになってしまったのです。「しまった。遅かった」と、「しまった」なんて言っている場合ではないでしょうとは思うのですよ。

こう書いて、「『タロウちゃん、かんじゃ駄目。リオちゃん痛かったよ』とリオの肩をさすりながら伝える」。どこが受け止めているのかというと、まだ受け止めていません。ただしかっているだけです。

そうしたら、実はここでタロウちゃんがリオの持っているコップを「あー」と指差しました。この指差した場面ではっとしたわけです。タロウが使っていたコップを取っていかれた。それでかんでしまったのだと分かって、それでタロウの思いを受け止めなければと思ったわけです。その後がいいですね。「タロウちゃん、コップ使ってたの。リオちゃんが持っていっちゃって嫌だったんだね」と言ったら、「うん」とうなずくわけです。「そうだね。悲しかったんだよね」「うん」とうなずく。「でもかむのは駄目よ。ほら、リオちゃん痛いって」「うん」とうなずく。「返してねって言うんだよ」「･･･てね」と泣きながら言う。「リオちゃん、痛かったなあ。コップ、タロウちゃんが使ってたんだって。返

してほしいんだって」、黙ってコップをタロウに渡す。

こういう感じが１～２歳児のクラスにいつもあるといいのです。子どもの自己主張はトラブルになります。でも、なったときにこうやって理由が分かると、「タロウちゃん、かんじゃ駄目」と言ったのが、「ああ、タロウちゃん、コップ使ってたの？」と言うと「うん」と言うでしょう。そして、「リオちゃんが持っていっちゃって嫌だったんだね」「うん」と言います。そして、それに追い討ちを掛けるように「そうだね。悲しかったんだよね」と言っています。３回このタロウちゃんの思いを受け止めているのです。１回で十分かもしれないけれども３回やっているわけです。何回が大事ではありません。子どもと一緒にいると、最初「うん」と言うときに、ああ何となく分かってくれていると思って、もう一言添えたらもう１回「うん」と言って、この子やっと分かってくれたと思って、もう一言といったときに何となく気持ちが分かり合えた感じになって、「でもかむのは駄目だよ」というタイミングは、保育者と子どもの絶妙な感覚の中で生み出されるのです。対話はまさにそういう感覚で、１回受け止めればいいでしょうというものではありません。この子がやっと自分の思いを受け止められたと思っているなと思うときに、ころ合いを見計らって、「でも、かむのは駄目だよ」と返していくわけです。こういうことを丁寧にする。つまり２歳のころに一人ひとりの思いをきちんと受け止めてやると、受け止められたと思った子どもは相手の思いを自分の中に刻もうとします。これが「返してねと言うんだよ」と言ったら「・・・てね」という言葉になったでしょう。自分の思いを受け止められて「・・・てね」という言葉を出す。それだけのことなのですが、こういうことを一人ひとりの中にきちんと保障する。そういう保育を１～２歳児のうちにやっておかなければいけないのです。そこを今、親子のところで保障されないのなら、集団保育がそこをまず保障してやるのです。そうしたら、先生の言うことはいろいろと自分の知性の中に刻み込もうと子どもの中に第２の自我を育てる芽が育ってくるのです。

ただ、２歳児はそこでうまくいったと思っていても、そう簡単ではありません。その下に行くと、「タロウちゃん、もうかんじゃ駄目だよ」「うん」とうなずいて、今度はリオちゃんの肩をもみながら冷やしていたら、ユヤちゃん（２歳０か月）が「わー」と突然泣き出す。ユヤの隣で困った表情で立っているタロウ。慌ててユヤのところに行くとあごに歯型が付いています。「またかみつ

いた！　リオのことに気を取られて、タロウの気持ちを十分に受け止めてあげられないまま手を離してしまった。大反省だ。どうしてかんじゃったんだろう。あっ、ユヤはさっきタロウが遊んでいたところにいたんだ。場所を取られたと思ったのかな？」。ユヤのかまれたところをタオルで冷やしながら、「タロウちゃん、がぶってしちゃったの？」と聞くと、「うん」と言う。「タロウちゃん、ここが良かったの？」と言うと「うん」とうなずく。「そうか、ユヤくんにどいてほしかったの？」と言ったら「うん」とうなずく。「どいてねって言うかな。がぶはしんのだに」と言ったら「うん」とうなずいて、「ユヤくん、痛いって、ごめんね」と言ったら、「めんね」と言うわけです。まだ借り物の言葉ですから本物の自分の中から出てくる言葉にはなりません。でも自分の思いを受け止めてくれる人がいると、「こういうときはごめんねって言おうね」と言ったら、「めんね」という言葉を返します。

丁寧に丁寧にこれを繰り返しながら、これが地層のように積み重なって２歳児の子どもの中に社会的知性が育つのです。「１回言えたでしょう。昨日言ったばかりだよね」と言っては駄目です。繰り返す中でこの子の中に社会的な存在としての自分のありようが身に付いてくるのです。本当に根気の要る仕事です。本当に丁寧に子どもの思いを受け止めなければいけない。そして、子どもの要求を受け止め、本当にあなたが気付かなければいけない世界まで連れていく。こういうことを２歳のころにやっておくと、３歳、４歳のころに子どもが育っていくのです。

そして、この先生が無意識のうちにやってくれたこと。記録を書いてみるとはっとしましたね。保育者は自分の実践を抽象的な言語ではなく、本当にこういう具体的な言葉で言わないと保育の意味が人に伝わらないし、みんなの財産にならないと思いました。僕はこの記録を受け止めて切り返すということでもう１回再評価しようと思ったのですが、あらためて読んでいるうちにはっとしました。

この先生が子どもの思いを受け止めたときに、「タロウちゃん、コップ使ってたの？」と言います。この物を欲しかったのだねという思いで受け止めたところでまず良かったのですが、その次に「リオちゃんが持っていっちゃって嫌だったんだね」と言う。そして、「そうだね。悲しかったんだね」と言った。この「嫌だったのだね」、「悲しかったんだね」という言葉が自然に出ています

よね。これは２歳児の思いを受け止めるときに、この「コップ使ってたの？」と受け止めたのと、「嫌だったんだね」、「悲しかったんだね」という言葉で返すのではちょっと質が違うことにはっと気付いたのです。それはどういうことかというと、１歳児だったらコップを使っていたのを「コップ、欲しかったんだね」と言いながら、コップが返ってくると満足するのです。つまり、１歳の自己主張は即物的要求といって、コップが欲しいから泣いていたので、コップが返ってきたら満足して遊ぶのです。自分の物が欲しいから泣いたので、物が返ってくれたらもう満足、これが１歳児です。でも、２歳児はたとえコップが返っても、「コップ、返って良かったね」と言ったら、「わーん」とまた言うのです。それはコップを取られて嫌だった、この気持ちもきちんと受け止めてほしいと、結構わがままでぜいたくになるのです。それは彼らの中に物に対する要求に対して感情が分化してくるのです。その分化した感情、こうするつもりなのだよという、そこまで受け止めてくれないと僕の気持ちはすっきりしないとなるわけです。だから、１歳児だったら「コップ欲しかったんだね」で十分なのですが、２歳の子は「取られて嫌だったんだね」という言葉を添えたことで自分の思いが受け止められたという感じになったわけです。僕はこの辺のことが子どもとのかかわりの中で自然にできる力が、保育者の対話能力だと思います。そういう力を持って子どもと向き合うこと、これがこの時代に求められて保育実践の質をつくるのだろうと思いました。

5-2. 子どもから出発し、子どもと一緒につくり、子どもが主体になる

もう一つだけ事例を言います。僕はあの3.11の地震の後に、そういう状況の中で子どもを幸せにするとは何なのかということを考えると、保育制度が本当の意味で子どもたちの幸せをつくっていくものとしてデザインされる。そういう意味では１～２歳児も本当に大事なのですが、こういう時代に私たちも専門家に全部依存しながらいろいろなことを決めてきたような気がします。赤ちゃんのころから自分の要求を出し、自分たちで物をつくり出していく。そういう本当に子どもの主体性と共同性が響き合う、そんな４～５歳の保育まで連れていかなくてはいけないでしょうと思いました。

もう一つだけ実践を聞いてほしいと思います。それは６年前に僕が出した記録でこんな実践がありました。これは今のように自己内対話ができないまま５

歳になってしまった子どもたちが集団をつくっています。そういう状況の中で、実は集団保育をどうつくり直したらいいのですかという悩みを聞いたときに、一人ひとり受け止めて返す、これでうまくいくならやりましょう。でも、大体５歳になるとそれでうまくいきません。それで子どもの要求から出発する。つまり一人ひとりがやりたいことをとことん付き合っていく、そんな保育をやってみましょうということです。

それは、子どもの要求から出発し、要求を子どもの必要性と必然性で伸ばしていく、そんな保育をやってみましょうということを言いました。クラス全員が一斉に動かなくてもいい。この子が例えばダンゴムシが面白かったら、ダンゴムシのプロジェクトというので、ダンゴムシを中心にしてこのクラスの中に物語を作ればいい。こっちの中に実は起きたプロジェクトがあるのですが、例えば海賊ごっこする子が海賊の帰るうちが作りたいと言ったら、そのプロジェクトをつくればいい。そうしながら子どもの要求が膨らみながら、クラスのみんなの主体性と共同性がつながっていく。そういう生活をつくりながら自己内対話の力をつくり直してみましょうということをお願いしました。

実はこの海賊ごっこの実践が面白かったのですが、海賊グループが帰るうちがないというのでうちを作りたいというのです。「うちを作りたいと言ってもあなたたち作れないでしょう」と言ったら、園の裏に工事の残った木があった。あれを使って小屋を作る。そこから出発して子どもの要求が出てきた。この子どもの要求がどうしてもこういう小屋を作りたいのだという。だから、子どもの要求はここに発展する必然性があります。そうしたらこれを応援しようというので、とにかくいろいろと七転八倒しながら子どもらが自分らの小屋を作った実践がありました。

その実践をやって、子どもらが作り上げて、得意げにみんなを招待して給食を食べていますよと言うので僕は見にいったのです。見にいったらこの小屋のところに人っ子一人いないわけです。「一体どうしたの」と言ったら、「２週間前からこうなってしまいました」と、今は別の活動を展開してしまったのです。

ちょうど６年前に新潟で中越地震が起きたのです。その中越地震が起きたときに、実は二人の子どもが新聞の切り抜きを持ってきたというのです。それはオリンピックがその前にあって、その選手の活躍を壁新聞でやっていて、その壁新聞が記事がなくなったけれども残っていたのです。そこに張れと言うから

張ったのです。５歳の子もこんなことに興味があるのかねと思っていると、５日後に優太ちゃんという子が車の中から救出されたというニュースがあって、そのときにはほとんどの子どもが写真を持ってきたのです。それを張っているうちに５歳の子も社会的なことに興味があるみたいだよというので、この中越地震に対して彼らが何かやれるかもしれないと考えたのです。そうしたら一人の先生が言うのです。「そういうときはお金を集めるのですよね」と言うから、「お金が一番だよね」と言ったら、「私は嫌です」と言うのです。「どうして」と聞いたら、「親の金を集めてもどうしようもないでしょう」と言うわけです。「親の金しかないでしょう」と言ったら、「子どもが自分で金を稼ぐなら別ですけれども」と言うから、「そんなの５歳児は無理でしょう」と言うのですが、子どもに１回聞いてみようというので話し合いをしたのです。そうしたら、子どもは「寒いからマフラーを編んであげればいいんじゃない。年中のときに編んだから」。アイデアはいいけれども、あなたの編んだマフラーはあまり喜ばれないかもしれない。そんなことは言いませんが、僕はちょっと思いました。

でも、この先生は言うのです。「では食べ物を買ったり、材料を買うお金はどうするの？」、マフラーを編むには毛糸が要るのです。その金がもともとないから問題なのだと言うのです。「新潟に送るときにも、郵便や宅急便のお金は掛かるよね」、普通はそれぐらい出します。だけれども、こういうことを言うのです。そうしたら、子どもは「みんなのお小遣いを合わせて買えばいいと思います」と言うのです。そうしたら、急に「持っていない人もいる」と言うでしょう。この先生の言葉がいやらしいというか、保育者らしい言葉です。「持っている人は自分のお小遣い全部あげられるの？　先生もお金は少しあるけど、ご飯も食べなきゃなんないし、全部あげられないな」、誰も全部やるとは言っていないですよね。ご飯を食べずに全部金を差し出せと言っているわけではないのです。保育者はちょっと受け止めながら、８割方否定の言葉を足しながらしゃべります。

それでこれは駄目かと思うと、考えたのです。「お金をコピーすればいいと思います」「ああ、それはやっちゃいけないのだよ」と言うのですが、子どもはお金を生み出す方法はありません。「でもベルマーク集めてるじゃん。それで物を送ってもらったら」、そうしたら、先生は「注文して届くまでに時間がかかってしまうから冬までには間に合わない」と返したら、「いい考えがある。

前にポップコーンを作る機械をベルマークでもらった。このベルマークでもらったもので作るんだから、今から集めるんじゃないからいいでしょう」と子どもは言うわけです。みんな「そうだ、そうだ。あの機械でポップコーンを作って売ればいい」と言うのです。でも先生は「でも売るものはどうするの」、先ほどから出ていた話で材料の金がない。ポップコーンを作るにはトウモロコシを買ってこなければいけないわけです。それを買う金がないと言っているのです。これではらちが明かない。

先生が一人そこでぱっとひらめいたのです。どこかの園でギンナンを拾って売ったという話を聞いたことがあります。「ああ、知ってる。イチョウの実でしょう。中華料理に入っていた。でも嫌い。あれまずい」「大人は好きな人が多いんだよ。フライパンでいってビールのおつまみとかにしておいしいんだから」と不謹慎なことを言いながら拾ったのです。これがギンナンだらけなのです。こうやってギンナンを拾うのですが、「臭い、ウンチのにおいがする」、「新潟で地震さえ起こらなければ拾わなくてもよかった」、「先生、ビニールちょうだい。両手で拾った方が早いから」、「この靴、新しいから汚したくない」、こんなことを言うのです。この子はこうやって臭い思いをしながら新潟の人のためにやっている自分たちが結構誇らしいのです。

そして、これは臭いのは当然ですが、それを洗って干すのです。１週間ぐらいすると市販のギンナンみたいに光ってきます。そして、子どもが何円で売ればいいかということで水戸市内のいろいろな店を調べてくることにしたのです。そうしたらカスミという店では65個で150円だったかとか、サンユーは20個98円だったとか、ヤオクニは30個50円とか調べてきたらいろいろと出てきて、50グラム150円と書いてあったというから、50グラムは26個あることが分かったわけです。それで比較したのだけれども、先生はどう決めていいか分からなくなって困っていたら、「１軒に50個は多いね。１軒20個だったら食べられるけど」と言うので、20個の値段を基本にしながらやることにしたのです。そうしたら、たくさんお金が集まった方が新潟に送れるから高くした方がいいとか、高いとお客さんは買ってくれないという論争になりまして、店よりちょっと安くすると買ってもらえるに違いないというので、20個50円で売ることにしました。

こうやって袋詰めを始めたとたんに、「ギンナンに顔を書いてかっぱギンナ

ンにしたら」と言うのです。幼稚園にかっぱがいるからかっぱギンナンにしようということで、ハルナちゃんが作ってきたかっぱの折り紙を付けたらというので、こうやってやり出したのです。とにかく20個50円でかっぱの折り紙を折ったやつを「新潟の人のために売っています」と言いながら呼び込みをしたわけです。そして、新聞の切り抜きなどでみんなに「新潟の人のために買ってください」と言いながら売って、そして、これが売り上げを計算する姿ですが、この子はいい顔をしていますね。そのまま商売人にしてもいいような顔をして生きています。これで１万4,610円というお金が集まったのです。だけれども、これは新潟にすぐ送ってはいけないのです。なぜかというと、ポップコーンを作る豆を買うために集めたお金だから、これを元手にポップコーンのためのトウモロコシを買いにいくというのでまた論争になるのです。子どもが１万円も使ってはいけないとかいろいろなことを言いながら、先生は１万円は置いておこう。四千何百円で豆を買ってきて、それを売るともうちょっと大きな金になるからと言いながらやったわけです。

結局、１万6,000円ぐらいのお金になったのですが、そのお金を新潟の幼稚園に送ることになりました。これは茨城大学の付属幼稚園で、僕が頼まれて行ってやった事例です。そこでやったときにみんなで手紙を書こうということで手紙を書きました。「私たちは心を込めてお金を集めました」。最初よく分からなかったのですが、この前、ある先生が教えてくれました。「これは何の絵だろうね」と言っていたら、「ギンナンを拾った絵でしょう」と言うから、ああ、そうか、この黄色いのはギンナンだったのだと、あの臭い思いをしたギンナンが書いてあるのだとやっと分かりました。これは「太陽を見ると元気になると母さんが言ったよ」というので書きました。この子は字が書けました。「新潟の人々へ。地震に負けずに頑張ってください。また新潟が平和になるといいですね」と、こんなことを書いて送ったのです。

そうしたら、向こうの園ではその１万6,000円ぐらいのお金を何に使うと話し合って、ホールの時計が壊れていて、プーさんの時計を買いましたというので、プーさんの時計の周りに園児が集まった写真とみんなの手紙をまた送ってくれました。子ども同士でこういう関係が起きました。

僕は地震が起きたらこんなことをしなければいけないと言っているのではないです。ただ、子どもの声を聞いていると、子どもたちはいろいろなことを考

えながら、自分たちもこんなことができたらいいとか、こんなことをしたいとか、もっと面白いことをやりたいとか、いろいろな思いがあります。保育は、１～２歳のときには一人ひとりの自己主張をきちんと受け止めて返す関係が大事なら、４～５歳になると自分たちのやりたいことをとことん大事にしながら、僕はこうしたいのだという思いをつなげていく。一人ひとりの願いをつなげてみんなの願いにしていく。そういう実践へと高めていくことで、この時代が求める保育実践をつくることができるのではないか。それは子どもたちがこの時代を心地よく自己内対話しながら生きる権利を保障する。このことに社会全体が責任を持たなければいけない時代の保育の在り方だし、こういう実践を赤ちゃんから６歳まで丁寧にすると、この社会全体が子どもをどのように見て、人間がどのように大切にされなければいけないかということを保育の現場から学んでもらうことになると思います。私たちはそういうエネルギーをこの社会に発信する実践力を、今、高める必要があるのかなと思います。

子どもから出発し、子どもと一緒につくり、子どもが本当に主体になる。その社会をイメージしながら、ぜひ大阪でたくさんの実践をつくっていただけたらと思います。

ちょっと延びました。私の時間は終わりにします。どうもありがとうございました。